五ヶ瀬中遺跡

－県道庄内久住線（大龍工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

序　　文

本書は、県道庄内久住線（大龍工区）道路改良工事に伴い、大分県教育委員会が大分県土木建築部大分土木事務所の依頼を受けて実施した五ヶ瀬中遺跡の発掘調査報告書です。

今まで由布市庄内町五ヶ瀬周辺では、良好な遺跡が確認されていませんでしたが、今回の調査によって弥生時代後期終末～古墳時代初期を中心とした集落の存在を示す遺跡を確認することができました。また出土資料から、縄文時代の遺跡の存在も想定されることから、当該地域における先史時代の広がりを認識することができました。

本書が埋蔵文化財の保護・啓発とともに、学術研究の一助として活用していただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただいた関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成31年3月29日

大分県立埋蔵文化財センター

所長　江田　豊

例　言

1. 本書は平成29年度に実施した、大分県由布市庄内町大字五ヶ瀬字中に所在する五ヶ瀬中遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は大分県土木建築部大分土木事務所の依頼を受けて大分県立埋蔵文化財センターが実施した。

3. 発掘調査は平成29年10月10日～11月15日にかけて実施し、大分県立埋蔵文化財センター調査第一課　主事土谷崇夫が担当した。

4. 発掘調査の実施に際し調査の支援業務委託を導入した。現地での写真撮影や遺構実測等の記録作成作業は県調査員の指揮監督の下、業務受託者である株式会社九州文化財総合研究所が行った。

5. 出土品の遺物洗浄、注記、接合、実測、遺物写真撮影、トレース等の整理作業は平成30年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託した。報告書作成業務は平成30年度に実施した。上記委託業務以外の遺構・遺物図版の作成は土谷が行った。

6. 出土遺物及び写真・実測図等の調査記録は大分県立埋蔵文化財センターで保管している。

7. 本書で作成する方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。

8. 本書の執筆・編集は土谷が行った。

目　次

序文
例言
目次
第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 1
　第３節　整理作業の経過 …… 2
　第４節　調査組織の構成 …… 2
第２章　遺跡の位置と環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　発掘調査の成果 …… 4
　第１節　調査の概要 …… 4
　第２節　基本層序 …… 4
　第３節　遺構 …… 5
　第４節　遺物 …… 22
第４章　総括 …… 27
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　五ヶ瀬中遺跡と周辺の遺跡 …… 3
第２図　五ヶ瀬中遺跡位置図 …… 5
第３図　五ヶ瀬中遺跡区域１遺構配置図 …… 6
第４図　区域１　西壁土層断面図 …… 7
第５図　区域１　ＳＨ１遺構実測図 …… 8
第６図　区域１　ＳＡ１・ＳＡ２・ＳＫ１遺構実測図 …… 9
第７図　区域１　ＳＫ２遺構実測図 …… 10
第８図　区域１　ＳＸ１遺構実測図 …… 11
第９図　五ヶ瀬中遺跡区域２遺構配置図 …… 12
第10図　区域２　東壁土層断面図 …… 13
第11図　区域２　ＳＨ２遺構実測図 …… 15
第12図　区域２　ＳＨ３・ＳＨ４遺構実測図 …… 16
第13図　区域２　ＳＫ３～ＳＫ７遺構実測図 …… 17
第14図　区域２　ＳＫ８遺構実測図 …… 18
第15図　区域１　ＳＨ１出土遺物実測図 …… 23
第16図　区域１　ＳＫ２・遺構検出時・撹乱出土遺物実測図 …… 24
第17図　区域２　ＳＨ２・ＳＨ４出土遺物実測図 …… 24
第18図　区域２　表土掘削・遺構検出時・撹乱出土遺物実測図 …… 25

表 目 次

第１表　区域１遺構計測表 …… 19
第２表　区域１遺構計測表 …… 20
第３表　区域２遺構計測表 …… 21
第４表　遺物観察表（土器） …… 26
第５表　遺物観察表（石器） …… 27
第６表　遺物観察表（金属器） …… 27

図版目次

図版１　五ヶ瀬中遺跡遠景（西から） …… 31
五ヶ瀬中遺跡全景
図版２　区域１　全景 …… 32
区域２　全景
図版３　区域１南側完掘全景（北より） …… 33
区域１北側完掘全景（南から）
図版４　区域１　ＳＨ１完掘（北から） …… 34
区域１　ＳＨ１完掘（東から）
図版５　区域１　ＳＨ１土器出土状況（東より） …… 35
区域１　ＳＡ２・ＳＡ３完掘（北より）
区域１　ＳＫ１完掘（東から）
区域１　ＳＫ２完掘（北西から）
区域１　ＳＸ１完掘（東から）
図版６　区域２　完掘全景（南から） …… 36
区域２　完掘全景（北西から）
図版７　区域２　ＳＨ２完掘（西から） …… 37
区域２　ＳＨ３完掘（東から）
図版８　区域２　ＳＫ３完掘（東から） …… 38
区域２　ＳＫ４完掘（北から）
区域２　ＳＫ５完掘（東から）
区域２　ＳＫ６完掘（東から）
区域２　ＳＫ７完掘（東から）
区域２　ＳＫ８完掘（東から）
区域２　ＳＫ９完掘（北から）
区域２　ＳＨ４完掘（西から）
図版９　出土遺物（第15図１～８） …… 39
図版10　出土遺物（第16図９～13） …… 40
図版11　出土遺物（第17図14～21） …… 41
図版12　出土遺物（第18図22～27） …… 42

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

県道庄内久住線（大龍工区）は由布市庄内町大龍から五ヶ瀬に至る一般県道である。調査の起因となった大龍工区（路線長2,020ｍ）は、現道拡幅・バイパス整備により幅員狭小、歩道未整備区間の解消を目指し、道路利用者の安全性の向上と広域的な観光支援が期待されている。県道庄内久住線道路改良工事に伴う調査は、大分県土木建築部大分土木事務所から平成29年４月20日付けで依頼され、５月26日に試掘調査を実施した。調査区は大分川に向かって延びる丘陵の緩斜面上に位置する。周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、竪穴建物とピット数基が検出され、竪穴建物からは古墳時代の土器が出土した。このことから調査の必要性が生じ、字名から五ヶ瀬中遺跡として大分県遺跡台帳への登録を行った。

第２節　発掘調査の経過

大分県土木建築部大分土木事務所長から大分県教育庁文化課長宛て埋蔵文化財発掘調査（本調査）依頼が平成29年９月８日付けで提出され、同９月８日付けで発掘調査の受諾と実施計画書、所要経費見積書を回答した。同10月６日付けで大分県教育委員会へ文化財保護法99条第１項に基づく発掘調査の施行を通知した。発掘調査は平成29年10月10日から着手し、11月15日に現地での調査業務を終了した。

調査は遺構が確認された856㎡を対象とし、調査の関係上、２区に分けて調査を行った。最初に区域２の表土剥ぎを行い、人力による掘削を開始した。完掘後空撮を行い、次に区域２から区域１への調査地の切りかえしを実施した。その後区域１は人力による掘削を行い、完掘後空撮を行った。調査終了後埋め戻しを行い、終了した。

調査区の設定や層序・遺構面の確認、遺構の認定、遺構埋土や調査区土層の分層等は埋蔵文化財センター調査員が行い、遺構の性格や遺跡全体の関係を把握しながら必要に応じて受託業者調査技師に作業の指示を与え、県調査員が常駐して全体を監督しながら調査精度を確保する体制をとった。

（調査工程の概要）

平成29年 10月10日（火）　重機による区域２の表土掘削開始
10月11日（水）　重機による区域２の表土掘削終了
10月12日（木）　作業員による区域２の遺構掘削及び遺構実測開始
10月25日（水）　区域２の遺構掘削終了・全景写真撮影
10月27日（金）　区域２の遺構実測終了
10月30日（月）　区域２の重機による埋め戻し完了
10月31日（火）　重機による区域１の表土掘削開始
11月１日（水）　重機による区域１の表土掘削終了
11月２日（木）　作業員による区域１の遺構掘削及び遺構実測開始
11月10日（金）　区域１の遺構掘削終了・全景写真撮影
11月13日（月）　区域１の遺構実測終了
11月14日（火）　区域１の重機による埋め戻し開始
11月15日（水）　区域１の重機による埋め戻し終了

第３節　整理作業の経過

整理作業及び報告書作成作業は平成30年度に実施した。整理作業は委託し、埋蔵文化財センター整理棟を作業場所として実施した。委託内容は出土遺物の水洗、出土地点の注記、遺物接合、遺物復元の前半工程と、遺物実測、遺物観察基礎データ作成、遺物実測図のトレース、遺物写真撮影及び遺物区分けや収納等諸作業の後半工程である。各作業工程ごとに調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。整理作業は箱数５箱を対象として実施し、平成30年４月２日から平成30年８月31日に遺物洗浄から遺物実測図トレース・遺物写真撮影までの各作業を行った。

報告書作成に係る遺構、遺物等図版作成作業や原稿執筆、編集作業は調査担当者が整理作業と並行して行った。

第４節　調査組織の構成

調査時の組織は以下のとおりである。

平成29年度発掘調査

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	大分県立埋蔵文化財センター	所　長	阿部辰也
	同	副所長兼調査第一課長	江田　豊
総務課	同	総務課長	神田　繁
	同	副主幹	石丸一輝
	同	主　事	堺井裕史
調査第一課	同	主　事	土谷崇夫（調査担当）

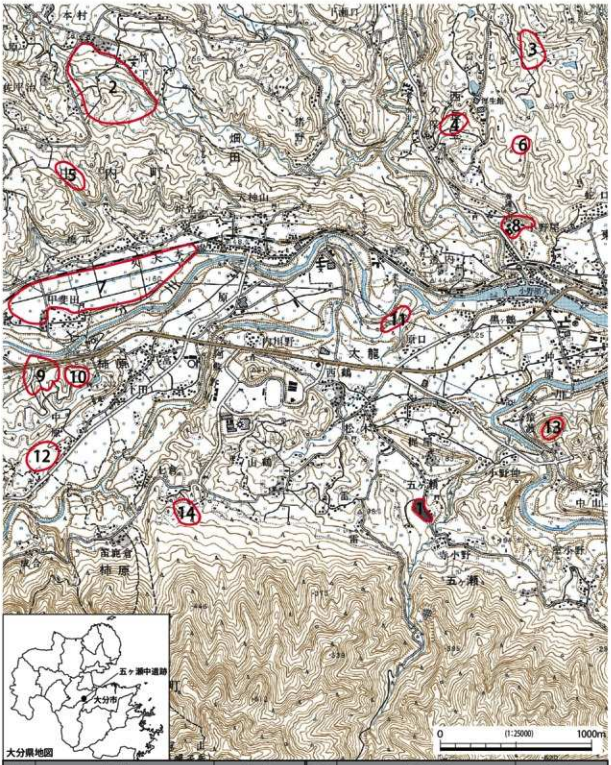
平成30年度整理作業

調査主体	大分県教育委員会		
調査総括	大分県立埋蔵文化財センター	所　長	江田　豊
	同	参事兼調査第一課長	友岡信彦
総務課	同	副所長兼総務課長	森次正浩
	同	副主幹	石丸一輝（平成30年９月30日まで）
		主　査	岡本佳子（平成30年10月１日から）
		主　事	堺井裕史
調査第二課	同	調査第二課長	吉田　寛
調査第一課	同	主　事	土谷崇夫（調査担当）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

由布市庄内町は大分県の中心部に立地し、由布岳を源とする大分川の上・中流域に位置する。町の中央部を大分川が東流し、町の北側と南側で、台地・丘陵や山地が連なっている。大分川の支流が南北方向に多数発達して、山地に深い谷を形成している。南側の山地に大龍山が位置し、周辺には小起伏山地があり、その先端に丘陵が連なる。この丘陵先端に五ヶ瀬中遺跡が立地し、山地を背後にもつ。



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	**五ヶ瀬中遺跡**	**古墳**	8	小野屋遺跡	弥生
2	竹ノ下遺跡	弥生	9	中原遺跡	弥生
3	猪ノ原遺跡	弥生	10	船ヶ尾城跡	中世
4	久保遺跡	弥生	11	仲ノ原遺跡	縄文・弥生
5	鳥ヶ鼻城跡	中世	12	一法師城跡	中世
6	松都遺跡	弥生	13	種現墩城跡	中世
7	甲斐田遺跡	弥生・中世	14	柳原遺跡	古墳

第１図　五ヶ瀬中遺跡と周辺の遺跡 (1/25000)

第２節　歴史的環境

庄内町では現在まで発掘調査例が少ないため全体像が明らかになっていない。旧石器時代の遺跡は、花牟礼山の北に上ノ池遺跡があり剥片尖頭器が出土している。また近接する直入町でもナイフ形石器や細石刃核が出土しているが、当地域全体としては希薄な状況にある。

縄文時代はカヤノ木地区、永足遺跡、戸宮遺跡等で土器や石器が出土しているが、後期後半になると、柳原遺跡において楕円形竪穴建物、土坑、貯蔵穴などとともに凹線文系三万田式土器がみられ、包含層も確認された。

弥生時代は西長宝字久保、猪ノ原、高岡字小松台など大分川流域の河岸段丘や丘陵上でも遺跡が分布するが、詳細は明らかになっていない。弥生中期後半には、柳原遺跡で竪穴建物が２基検出され、下城式土器や須玖式土器が出土している。また弥生後期後半から古墳時代初頭の竪穴建物２基も確認され、その内１基はベット状の高まりをもつ構造になっている。

古墳時代は、弥生時代と同様に河岸段丘や丘陵上に遺跡は位置するようであるが、調査例がなく、詳細は明らかになっていなかったが、今回の調査で弥生・古墳時代の遺物・遺構が出土していることから貴重な発見となった。

平安時代に入ると、この地域は豊後武士団の中心的存在として力を持っていた地方豪族である大神氏の影響下にあった。大神氏は豊後一円に一族を土着させ、地域を開発支配するようになる。庄内町地域もその支配下にあった。

鎌倉時代に大友氏が守護職として任命され豊後入りした後、室町時代の15～16世紀では、大友氏の加判衆である大津留氏の居城である松ヶ尾城跡を筆頭に、一法師淡路守義成の居城である一法師城跡、橋爪氏の鳥ヶ鼻城跡、風早氏の船ヶ尾城跡、狭間氏の権現獄城跡などが庄内町域内に築かれた。

(参考・引用文献)
坂本嘉弘 1994『十合野遺跡』庄内町教育委員会
庄内町誌編集委員会 1990『庄内町誌』庄内町
村上久和 1994『柳原遺跡』庄内町教育委員会

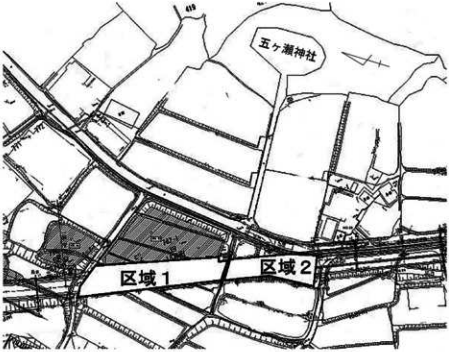
第３章　発掘調査の成果

第１節　調査の概要

調査を実施した五ヶ瀬中遺跡は、由布市庄内町大字五ヶ瀬字中に位置する。調査地は大分川に向かって延びる丘陵の緩斜面上にあり、やや平坦な地形を呈している。発掘調査は試掘調査結果を参考に遺構が確認された856㎡を対象地として第２図のように調査区の設定を行った。区域１は北側から南側へ向けて低く、区域２では南側から北側へ低くなり、区域１と区域２の間が最も低い谷地形を形成する。発掘調査では、区域１で竪穴建物１基、柵列２基、土坑２基、ピットが多数検出された。区域２では竪穴建物２基、土坑７基、ピットが検出された。ピットは区域１の北側と区域２の南側に集中しており、その間に土坑や竪穴建物がみられる。明確に時期が分かる遺構としては、区域１のＳＨ１の竪穴建物、区域２のＳＨ２・ＳＨ４の竪穴建物であり、いずれも弥生時代後期を中心とした土器が出土している。

第２節　基本層序

区域１の埋土（第４図）は、第１層は表土で、第５層までは盛土である。第６層の黒褐色砂質土、第11層の暗



第２図　五ヶ瀬中遺跡位置図（1/1250）

褐色砂質土、第12層の暗褐色砂質土を多く含む黄褐色砂質土を経て、黄褐色砂質土の地山に至る。区域２の埋土（第10図）は、第１層が表土、第２層・第３層は黒褐色砂質土の二次堆積土で、縄文時代晩期前葉から中葉の土器・石器を含む。第９層の暗褐色砂質土、第10層の暗青灰色砂質土、第11層の褐色砂質土を経て、遺構検出面である黄褐色砂質土の地山に至る。

第３節　遺構

調査では区域１・区域２と調査区を設けており、本書では区域ごとに遺構について説明する。

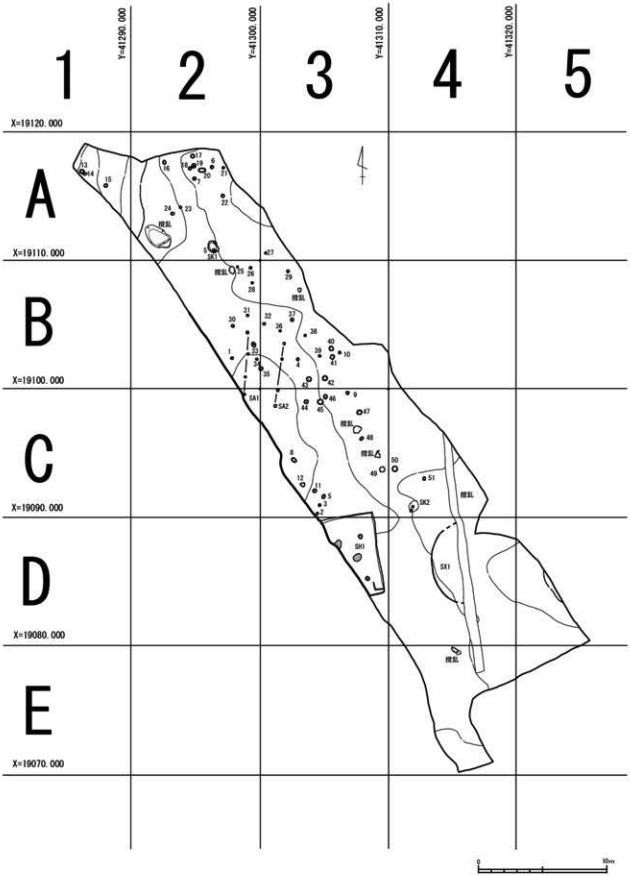
区域１

ＳＨ１（第５図）

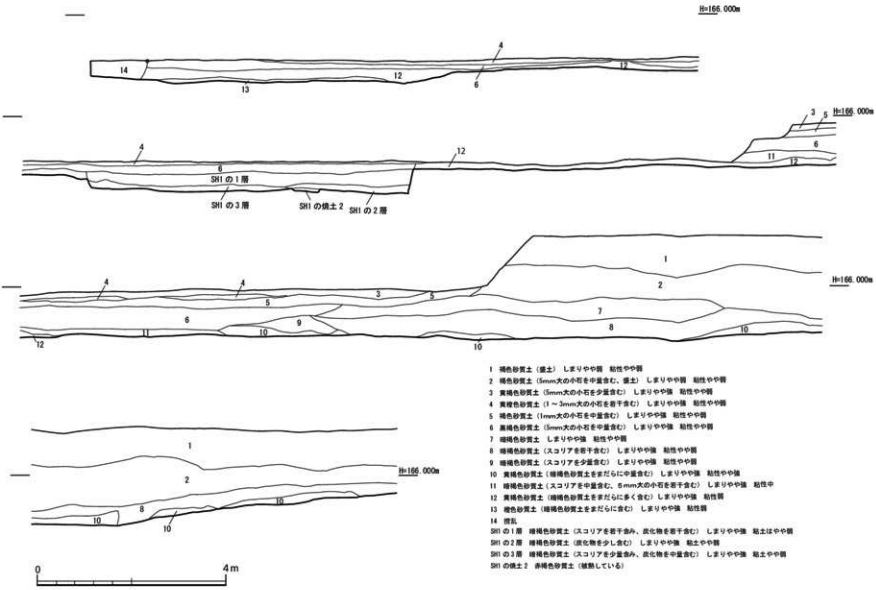
調査区のＤ３グリットで検出した竪穴建物である。遺構検出面の標高は164.4ｍである。規模は一辺6.37ｍで、もう一辺は調査区外となり、長さ不明、深さ0.48ｍである。遺構埋土は、第１層は暗褐色砂質土でスコリア・炭化物を若干含む。第２層は暗褐色砂質土で炭化物を少し含む。内部から主柱穴２基確認された。調査区外に２基の主柱穴が存在すると思われ、４本柱の構造であったと考えられる。また焼土が２基みられ、深さは0.05ｍ程度でかなり浅い。竪穴建物の中央付近に位置する。また南側にテラスがみられ、階段状になっている。床面から弥生時代後期終末～古墳時代初期の甕と打製石斧が出土している。

ＳＡ１（第６図）

調査区のＢ３・Ｃ３グリットで検出した柵列である。ピット４つの並びを確認しており、南北方向に5.2ｍ、３間の規模である。検出遺構面の標高は164.7～164.9ｍであり、北から南へ向かって高くなる。径は0.16～0.24ｍである。深さはピット２の0.29ｍ以外、0.05～0.09ｍの深さである。遺構埋土は、暗褐色砂質土で黄褐色ブロックを含む。次に述べるＳＡ２と並行している。

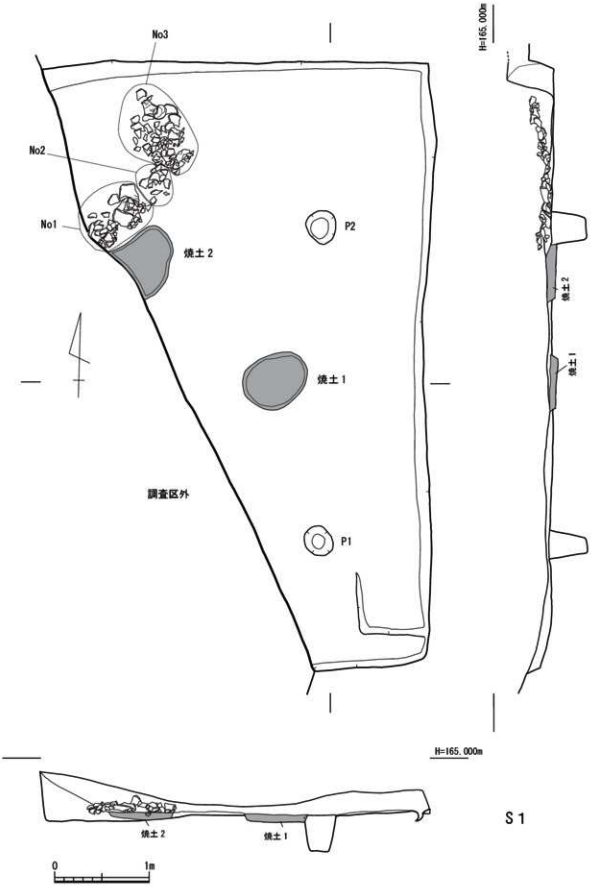


第３図　五ヶ瀬中遺跡区域１遺構配置図（1/300）

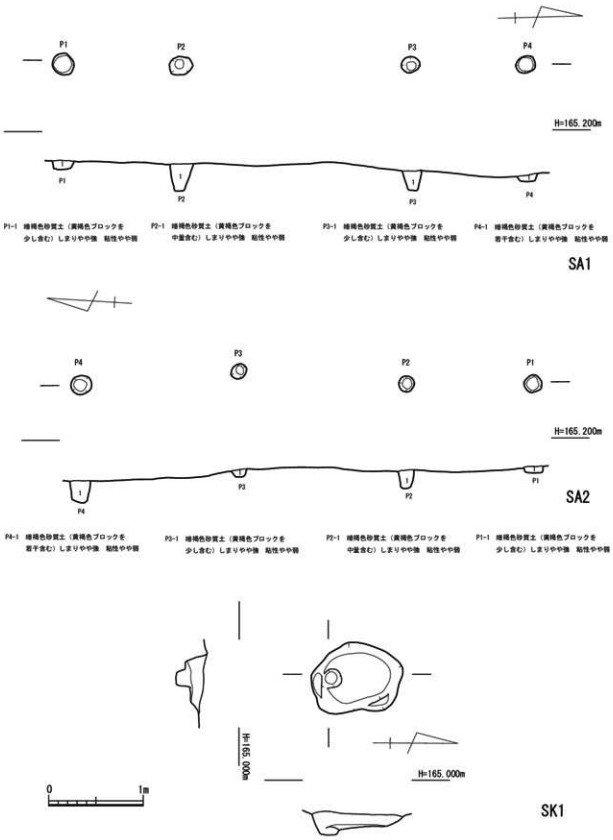


1　褐色砂質土（盛土）　しまりやや弱　粘性やや弱
2　褐色砂質土（5mm大の小石を中量含む、盛土）　しまりやや弱　粘性やや弱
3　黄褐色砂質土（5mm大の小石を少量含む）　しまりやや強　粘性やや弱
4　黄褐色砂質土（1～3mm大の小石を若干含む）　しまりやや強　粘性やや弱
5　褐色砂質土（1mm大の小石を中量含む）　しまりやや強　粘性やや弱
6　黒褐色砂質土（5mm大の小石を中量含む）　しまりやや強　粘性やや弱
7　暗褐色砂質土　しまりやや強　粘性やや弱
8　暗褐色砂質土（スコリアを若干含む）　しまりやや強　粘性やや弱
9　暗褐色砂質土（スコリアを少量含む）　しまりやや強　粘性やや弱
10　黄褐色砂質土をまだらに中量含む）　しまりやや強　粘性やや強
11　暗褐色砂質土（スコリアを中量含む、5mm大の小石を若干含む）　しまりやや強　粘性中
12　黄褐色砂質土（暗褐色砂質土をまだらに多く含む）しまりやや強　粘性弱
13　褐色砂質土（暗褐色砂質土をまだらに含む）　しまりやや強　粘性弱
14　埋丸
SH の1層　暗褐色砂質土（スコリアを若干含み、炭化物を若干含む）　しまりやや強　粘土はやや弱
SH の2層　暗褐色砂質土（炭化物を少し含む）　しまりやや強　粘土やや弱
SH の3層　暗褐色砂質土（スコリアを少量含み、炭化物を中量含む）　しまりやや強　粘土やや弱
SH の焼土2　赤褐色砂質土（被熱している）

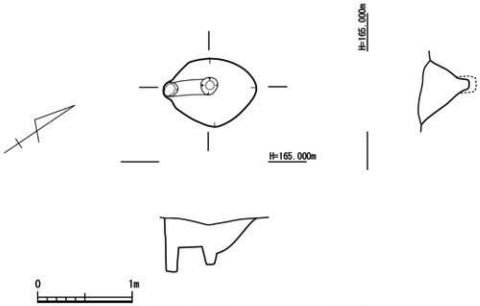
第４図　区域１　西壁土層断面図（1/80）



第5図　区域1　SH1遺構実測図（1/40）



第６図　区域１　SA1･SA2･SK1 遺構実測図（1/40）



第７図　区域１　SK2 遺構実測図（1/40）

ＳＡ２（第６図）

調査区のＢ２・Ｃ２グリットで検出した柵列である。ピット４つの並びを確認しており、南北方向で5.1ｍ、３間の規模である。検出遺構面の標高は164.6～164.9ｍであり、北から南に向かって高くなる。径は0.1～0.20ｍである。深さは0.07ｍ～0.21ｍである。埋土は、暗褐色砂質土で黄褐色ブロックを含む。先に述べたＳＡ１と並行している。ＳＡ１とＳＡ２の間の埋土は硬度があり、通路として使用された可能性をもつ。

ＳＫ１（第６図）

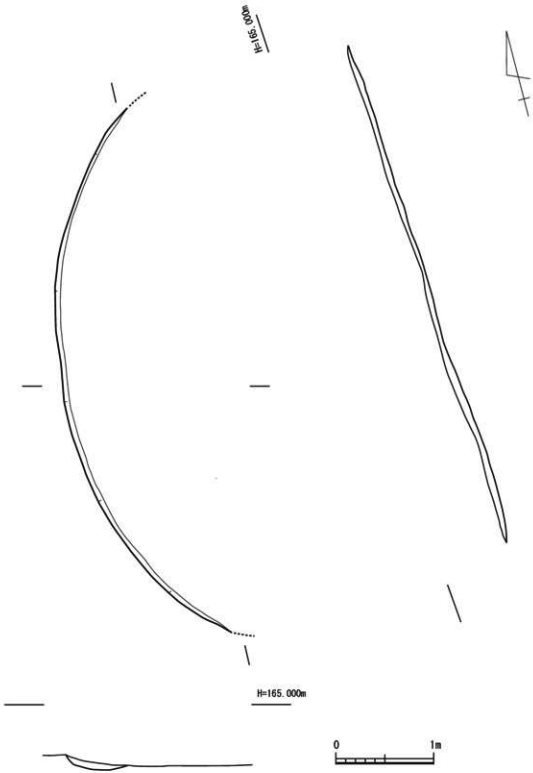
調査区のＡ２グリットで検出した土坑である。形は長楕円形である。検出遺構面の標高は164.5ｍで、規模は長径0.96ｍ、短径0.76ｍ、深さ0.27ｍである。土坑の埋土は黒褐色砂質土であるが、黄褐色ブロックを多く含むため、掘削土を再び埋め戻したものと考えられる。また、土坑の南端にピットが確認された。ピットの埋土は黄褐色ブロックを含む黒褐色砂質土である。土坑と埋土が同じことから同一の遺構と考えられる。

ＳＫ２（第７図）

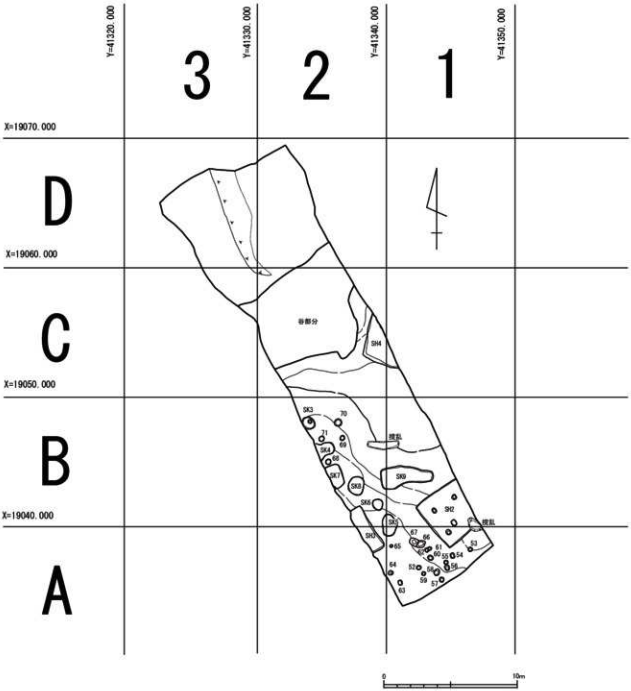
調査区のＣ４グリットで検出した土坑である。形は長楕円形である。遺構検出面の標高は164.4ｍで、規模は長径0.98ｍ、短径0.72ｍ、深さ0.29ｍである。土坑の埋土は黒褐色砂質土で黄褐色ブロックを中量含む。土坑の中央のピットは撹乱である。南端のピットは黄褐色ブロックを含む黒褐色砂質土の埋土であった。土坑と埋土は同じことから同一の遺構と考えられる。この土坑の中の南端部ピットがみられる構造はＳＫ１の構造と同じである。また磨製石斧も出土している。

ＳＸ１（第８図）

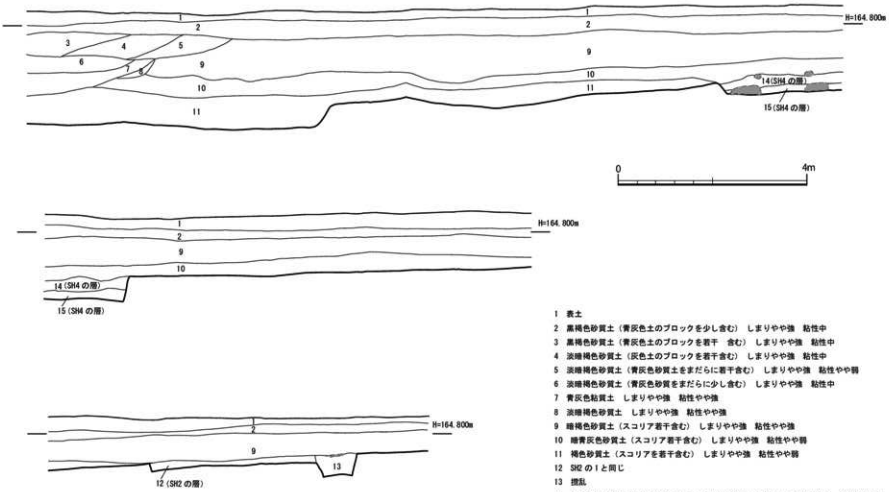
調査区のＤ４グリットで検出した不明遺構である。東半分は撹乱によって削平され残っていない。円形の形状により竪穴建物の可能性も考えられる。遺構検出面の標高は164.4ｍで、残存規模は現存長5.38ｍ、深さは0.07ｍであ



第８図　区域１　SX1 遺構実測図（1/40）



第９図　五ヶ瀬中遺跡区域２遺構配置図（1/300）



1　表土
2　黒褐色砂質土（青灰色土のブロックを少し含む）　しまりやや強　粘性中
3　黒褐色砂質土（青灰色土のブロックを若干　含む）　しまりやや強　粘性中
4　淡暗褐色砂質土（灰色土のブロックを若干含む）　しまりやや強　粘性中
5　淡暗褐色砂質土（青灰色砂質土をまだらに若干含む）　しまりやや強　粘性やや弱
6　淡暗褐色砂質土（青灰色砂質をまだらに少し含む）　しまりやや強　粘性中
7　青灰色粘質土　しまりやや強　粘性やや強
8　淡暗褐色砂質土　しまりやや強　粘性やや強
9　暗褐色砂質土（スコリア若干含む）　しまりやや強　粘性やや強
10　暗青灰色砂質土（スコリア若干含む）　しまりやや強　粘性やや弱
11　褐色砂質土（スコリアを若干含む）　しまりやや強　粘性やや弱
12　SH2 の 1 と同じ
13　撹乱
14　淡暗褐色砂質土（小石を少し含む　スコリアを若干含む）　しまりやや強　粘性やや弱
15　暗青灰色砂質土（小石を少し含む　スコリアを若干含む）　しまり強　粘性弱

第 10 図　区域 2　東壁土層断面図

る。不明遺構の埋土は暗褐色砂質土で褐色が混じる。遺物が出土していないため時期は不明である。埋土は暗褐色砂質土のため、ＳＨ１と同時期の可能性が考えられる。

区域２

ＳＨ２（第11図）

調査区のＡ１・Ｂ１のグリットで検出した竪穴建物であり、東は調査区外へと延びる。形は方形である。遺構検出面は164.3ｍで、規模は一辺4.05ｍ、もう一辺は不明である。深さは0.18ｍである。遺構の埋土は１層が暗褐色砂質土でスコリアを若干含む。２層は淡暗褐色砂質土でスコリアを若干含む。３層は暗褐色砂質土である。内部は柱穴が４基確認でき、深さは0.35～0.37ｍである。４本柱の構造をもつ竪穴建物であろう。ピット４は撹乱に切られている。中央南側に焼土をもち、深さは0.15ｍである。弥生時代の甕と弥生時代後期中頃～後半の壺が出土している。

ＳＨ３（第12図）

調査区のＡ２・Ｂ２グリットで出した竪穴建物と思われる遺構の一部である。形は隅丸方形である。遺構検出面の標高は164.3ｍで、規模は一辺3.74ｍで、他辺は一部未調査のため不明である。深さは0.38ｍである。遺構埋土は１層が暗褐色砂質土でスコリアを若干含む。２層は暗褐色砂質土で黄褐色砂質土ブロックを若干含む。３層は黒褐色砂質土で黄褐色砂質土を若干含む。調査区内からは柱穴は検出されなかった。時期が分かる土器は出土しなかったため時期は不明である。

ＳＨ４（第12図）

調査区のＣ１・Ｃ２のグリットで検出した竪穴建物と思われる遺構であり、ほとんどが調査区外へ延びる。形は方形である。遺構検出面は163.5ｍで、規模は調査区内で一辺3.24ｍ以上、深さ0.63ｍである。１層は淡暗褐色砂質土で小石を少し含み、スコリアを若干含む。２層は暗青灰砂質土で小石を少し含み、スコリアを若干含む。弥生時代の高杯・鉢、弥生時代後期の甕、弥生時代後期終末の壺と長頸壺が出土している。

ＳＫ３（第13図）

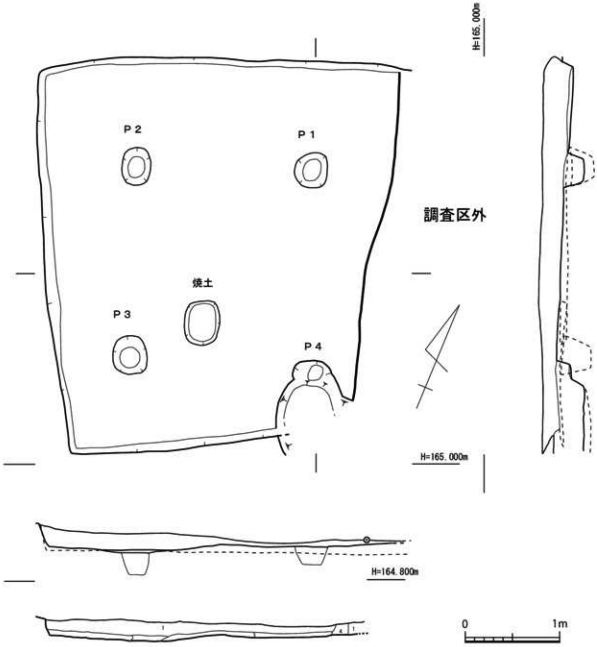
調査区のＢ２グリットで検出した土坑である。形は円形である。遺構検出面の標高は164.2ｍで、規模は長軸1.04ｍ、短軸0.89ｍ、深さは0.37ｍである。土坑の埋土は暗褐色砂質土でスコリアを若干含む。土坑の底面東側でピットが検出された。暗褐色砂質土でスコリアを若干含む埋土であった。土坑とピットの埋土は同じであったので、同時期に、掘削されたものと考えられる。この土坑の中にピットがみられる構造は区域１のＳＫ１・ＳＫ２の構造と同じである。

ＳＫ４（第13図）

調査区のＢ２グリットで検出した土坑である。形は不整形である。遺構検出面の標高は164.3ｍで、規模は長軸1.41ｍ、短軸1.35ｍ、深さは0.11ｍである。土坑の埋土は暗褐色砂質土でスコリアを若干含む。

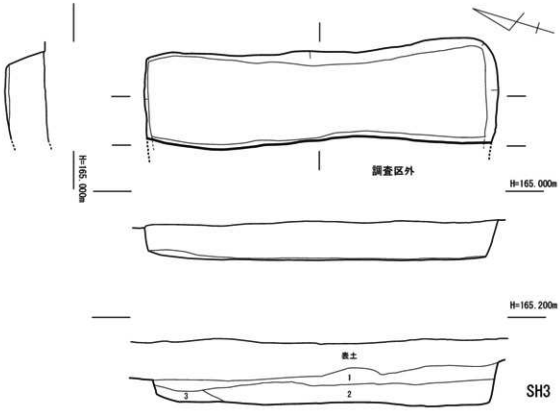
ＳＫ５（第13図）

調査区のＡ１・Ａ２・Ｂ１・Ｂ２グリットで検出した土坑である。形は不整形である。遺構検出面の標高は164.6ｍで、規模は長軸1.70ｍ、短軸1.15ｍ、深さは0.11ｍである。土坑の埋土は暗褐色砂質土でスコリアを若干含む。

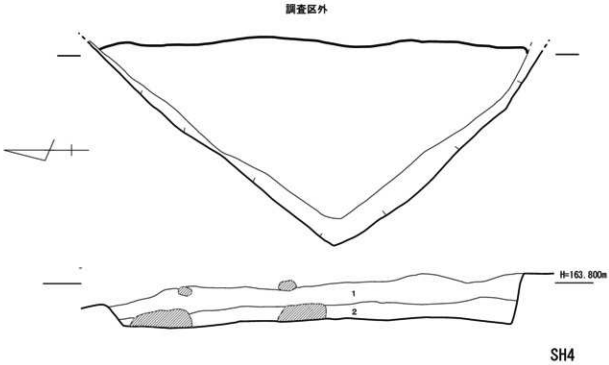


1　暗褐色砂質土（スコリア若干含む）　しまりやや弱　粘性中
2　淡褐褐色砂質土（スコリア若干含む）　しまりやや弱　粘性やや弱
3　暗褐色砂質土　しまりやや弱　粘性やや強
4　黄褐色砂質土ブロック　しまりやや強　粘性中

第 11 図　区域 2　SH2 遺構実測図



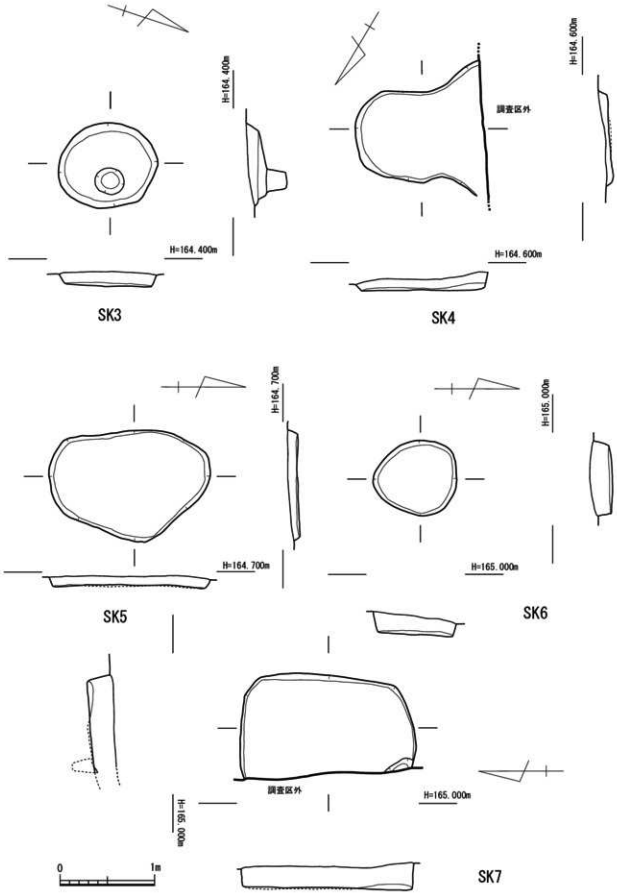
1　暗褐色砂質土　しまりやや強　粘性やや強　（スコリアを若干含む）
2　暗褐色砂質土（黄褐色砂質土ブロックを若干含む　スコリア若干含む）　しまりやや強　粘性やや強
3　黒褐色砂質土（黄褐色砂質土ブロック若干含む　スコリア若干含む）　しまりやや強　粘性やや強



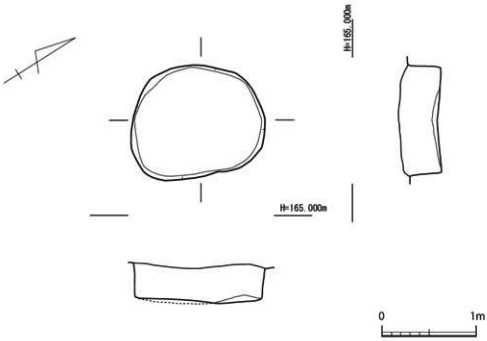
1　淡暗褐色砂質土（小石を少し含む　スコリアを若干含む）　しまりやや強　粘性やや弱
2　暗青灰色砂質土（小石を少し含む　スコリアを若干含む）　しまり強　粘性弱

0　1m

第 12 図　区域 2　SH3・SH4 遺構実測図



第 13 図　区域 2　SK3 ～ SK7 遺構実測図



第 14 図　区域 2　SK8 遺構実測図

ＳＫ６（第13図）

調査区のＢ２グリットで検出した土坑である。形は円形である。遺構検出面の標高は164.5ｍで、規模は長軸0.88ｍ、短軸0.7ｍ、深さは0.24ｍである。土坑の埋土は暗褐色砂質土でスコリアを若干含む。

ＳＫ７（第13図）

調査区のＢ２グリットで検出した土坑である。形は隅丸方形である。遺構検出面の標高は164.3ｍで、規模は長軸1.83ｍ、短軸1.04ｍ（一部未調査）、深さは0.65ｍである。土坑の埋土は黒褐色砂質土でスコリアを若干含む。土坑の底の南側にピットがみられる。埋土は暗褐色砂質土で黄褐色砂質土が混じる。

ＳＫ８（第14図）

調査区のＢ２グリットで検出した土坑である。形は円形である。遺構検出面の標高は164.9ｍで、規模は長軸1.38ｍ、短軸1.18ｍ、深さ0.41ｍである。土坑の埋土は黒褐色砂質土でスコリアを若干含む。

第１表　区域１　遺構計測表

遺構名	種　別	グリット	標高(m)	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)
SH1	竪穴建物	D31	164.424	6.37	―	0.48
	(P1)	D3	164.415	0.34	0.29	0.37
	(P2)	D3	164.410	0.36	0.32	0.36
	焼土１	D3	164.388	0.68	0.56	0.05
	焼土２	D3	164.438	0.56	0.54	0.07
SA1	(P1)	C2	164.896	0.22	0.23	0.09
	(P2)	B2	164.872	0.24	0.18	0.29
	(P3)	B2	164.752	0.22	0.16	0.05
	(P4)	B2	164.743	0.22	0.17	0.09
SA2	(P1)	C3	164.902	0.21	0.18	0.09
	(P2)	C3	164.669	0.18	0.15	0.15
	(P3)	B2	164.828	0.18	0.16	0.07
	(P4)	B2	164.742	0.21	0.20	0.21
SK1	土坑	A2	164.564	0.96	0.76	0.27
SK2	土坑	C3	164.419	0.98	0.72	0.29
SP1	ピット	B2	164.867	0.23	0.20	0.20
SP2	ピット	C3	164.734	0.20	0.18	0.16
SP3	ピット	C3	164.749	0.22	0.22	0.15
SP4	ピット	B3	164.734	0.23	0.20	0.26
SP5	ピット	C3	164.775	0.34	0.25	0.21
SP6	ピット	A2	164.471	0.26	0.25	0.35
SP7	ピット	A2	164.569	0.25	0.25	0.34
SP8	ピット	C3	164.847	0.44	0.28	0.53
SP9	ピット	C3	164.319	0.26	0.25	0.21
SP10	ピット	B3	164.339	0.21	0.21	0.19
SP11	ピット	C3	164.792	0.31	0.28	0.32
SP12	ピット	C3	164.781	0.36	0.31	0.33
SP13	ピット	A1	165.576	0.33	0.33	0.44
SP14	ピット	A1	165.502	0.32	0.19	0.51
SP15	ピット	A1	165.312	0.32	0.27	0.37
SP16	ピット	A2	164.763	0.34	0.26	0.24
SP17	ピット	A2	164.554	0.31	0.29	0.20
SP18	ピット	A2	164.569	0.26	0.25	0.33
SP19	ピット	A2	164.237	0.34	0.33	0.31
SP20	ピット	A2	164.530	0.57	0.31	0.14
SP21	ピット	A2	164.466	0.21	0.17	0.25
SP22	ピット	A2	164.451	0.26	0.24	0.14
SP23	ピット	A2	164.184	0.18	0.17	0.16

第２表　区域１　遺構計測表

遺構名	種　別	グリット	標高(m)	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)
SP24	ピット	A2	164.320	0.29	0.22	0.41
SP25	ピット	B2	164.558	0.17	0.16	0.14
SP26	ピット	B2	164.543	0.22	0.20	0.17
SP27	ピット	A3	164.492	0.18	0.14	0.09
SP28	ピット	B2	164.558	0.18	0.18	0.05
SP29	ピット	B3	164.453	0.22	0.20	0.15
SP30	ピット	B2	164.821	0.24	0.22	0.48
SP31	ピット	B2	164.727	0.18	0.16	0.12
SP32	ピット	B3	164.760	0.23	0.18	0.06
SP33	ピット	B2	164.796	0.43	0.31	0.23
SP34	ピット	B2	164.836	0.22	0.15	0.15
SP35	ピット	B3	164.806	0.40	0.33	0.24
SP36	ピット	B3	164.698	0.18	0.15	0.14
SP37	ピット	B3	164.620	0.27	0.26	0.23
SP38	ピット	B3	164.564	0.21	0.18	0.11
SP39	ピット	B3	164.547	0.21	0.16	0.17
SP40	ピット	B3	164.533	0.38	0.35	0.16
SP41	ピット	B3	164.541	0.35	0.31	0.15
SP42	ピット	B3	164.538	0.48	0.41	0.21
SP43	ピット	B3	164.648	0.39	0.35	0.11
SP44	ピット	C3	164.797	0.32	0.27	0.22
SP45	ピット	C3	164.678	0.45	0.38	0.35
SP46	ピット	C3	164.584	0.35	0.30	0.13
SP47	ピット	C3	164.514	0.40	0.37	0.25
SP48	ピット	C3	164.564	0.34	0.20	0.28
SP49	ピット	C3	164.522	0.43	0.43	0.05
SP50	ピット	C4	164.484	0.42	0.42	0.05
SP51	ピット	C4	164.363	0.27	0.22	0.11
SX1	不明遺構	D4	164.484	—	—	0.07

第３表　区域２　遺構計測表

遺構名	種　別	グリット	標高(m)	長軸(m)	短軸(m)	深度(m)
SH2	竪穴建物	A1・B1	164.380	4.05	—	0.18
	(P1)	B2	164.110	0.36	0.35	0.15
	(P2)	B2	164.092	0.39	0.32	0.24
	(P3)	A1	164.148	0.36	0.36	0.29
	(P4)	B2	164.188	0.47	0.37	0.23
SH3	竪穴建物	A2・B2	164.380	3.74	—	0.38
SH4	竪穴建物	C1・C2	163.850	3.24	2.92	0.63
SK3	土坑	B2	164.239	1.04	0.89	0.37
SK4	土坑	B2	164.369	—	—	0.11
SK5	土坑	B1・B2 A1・A2	164.638	1.70	1.15	0.11
SK6	土坑	B2	164.527	0.88	0.70	0.24
SK7	土坑	B2	164.307	1.83	(1.04)	0.65
SK8	土坑	B2	164.999	1.38	1.18	0.41
SK9	土坑	B1・B2	164.155	4.04	1.66	0.13
SP52	ピット	A1	164.679	0.37	0.34	0.42
SP53	ピット	B2	164.399	0.34	0.33	0.07
SP54	ピット	B2	164.453	0.42	0.33	0.44
SP55	ピット	B2	164.511	0.32	0.32	0.39
SP56	ピット	B2	164.548	0.44	0.36	0.25
SP57	ピット	B2	164.667	0.38	0.36	0.47
SP58	ピット	B2	164.645	0.53	0.44	0.52
SP59	ピット	B2	164.715	0.32	0.31	0.23
SP60	ピット	B2	164.581	0.44	0.36	0.41
SP61	ピット	B2	164.528	0.26	0.25	0.2
SP62	ピット	B2	164.584	0.33	0.27	0.47
SP63	ピット	B2	164.743	0.38	0.32	0.27
SP64	ピット	B2	164.652	0.38	0.34	0.18
SP65	ピット	B2	164.658	0.24	0.22	0.07
SP66	ピット	B2	164.558	0.58	0.57	0.37
SP67	ピット	B2	164.617	0.62	0.54	0.5
SP68	ピット	B2	164.459	0.44	0.41	0.08
SP69	ピット	B2	164.219	0.38	0.36	0.05
SP70	ピット	B2	164.135	0.56	0.55	0.12
SP71	ピット	B2	164.146	0.43	0.41	0.11

第４節　遺物

第15図は区域１のＳＨ１から出土した遺物である。１は弥生時代の甕の口縁部である。内面は横方向のハケ、外面は縦方向のハケが施されている。１㎝につき８本のハケの単位がみられる。２は弥生時代後期後半の小型の鉢である。器形は胴部が丸く寸詰まりで、口縁部は外に開く。外面胴部の下部に縦方向のハケ、胴部の上部はナデがみられる。口縁部は内外面とも横方向のナデである。外面は胴部から口縁部まで丹塗り、内面は口縁部に施されている。３は床面からの出土（取り上げ№１）の弥生時代後期終末～古墳時代初期の甕である。器形は口縁部がやや立ち上がりながら、やや開き、胴部はやや長く伸びている。外面において、胴部の下部にはヘラケズリがあり、上部には縦方向のハケメがみられる。内面の胴部下部にはヘラケズリがあり、上部はケズリの後ナデがみられる。口縁部の外面には縦方向のハケメがあり、内面は斜め方向のハケメがみられる。４は床面出土（取り上げ№１）の弥生時代後期終末頃の甕である。器形は胴部がゆるく下に伸び、口縁部は外に開く。内面は胴部に指圧痕があり、内外面ともナデが施されている。５・６・７は弥生土器の底部である。５・７は弥生時代後期終末、６は弥生時代中期～後期前葉のものである。８は打製石斧である。表面と裏面は、いずれも下部方向から打撃を受け、主面が作り出されている。その後周縁部に小さな剥離を施している。石材は安山岩である。

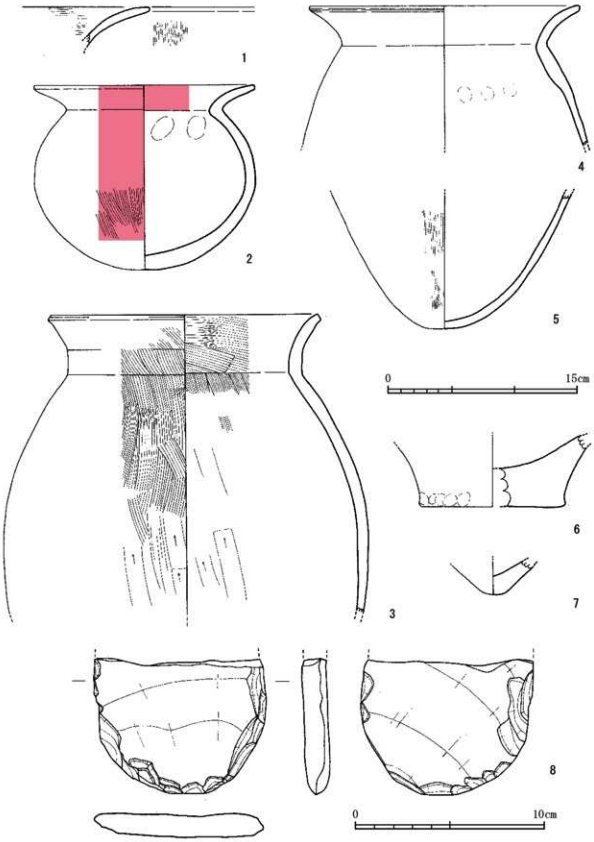
第16図９は区域１のＳＫ２から出土した緑色片岩製の磨製石斧である。器形や厚さが薄いことから縄文時代のものと推定される。表・裏面も主面は斜め方向に、その周囲は縦方向に研磨が施されている。10は遺構検出時に出土した縄文時代晩期前半の深鉢である。内外面とも横方向の条痕がみられる。第16図11～13は撹乱からの出土である。11は縄文時代晩期前半の深鉢である。口縁部外側には凹線が４条みられ、全体はナデが施されている。12は縄文時代晩期初頭の滋賀里Ⅱ式の浅鉢である。波状口縁をなし、文様は沈線でゆるい弧状の沈線文を施す。13は石鏃である。表面の主要剥離面は右下部から、裏面は左上部から打撃を受け作り出されている。周囲は上部から下部に向けて連続して押圧剥離が施されている。また凹部にはノッチがみられる。左側の脚部は欠損している。

第17図14・15は区域２のＳＨ２から出土した遺物である。14は弥生時代の甕の口縁部である。内外面とも丹塗りが施されている。15は弥生時代後期中頃～後半の壺の口縁部である。外面に櫛描波状文が施されている。

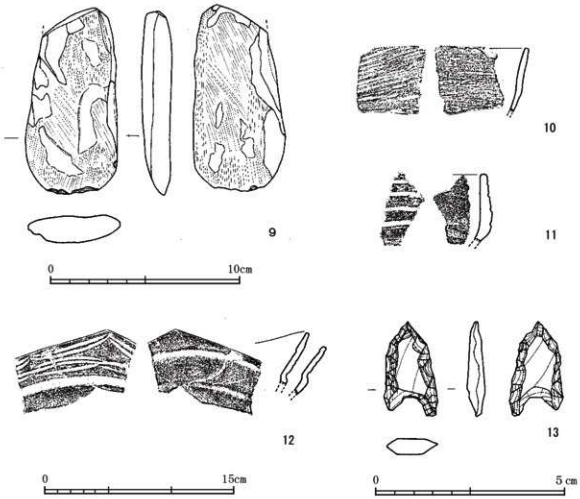
第17図16～21は区域２のＳＨ４から出土した遺物である。16は弥生時代で高坏の口縁部である。内外面とも丹塗りが施されている。17は弥生時代で鉢の口縁部である。ハケメが内外面とも顕著にみられる。また丹塗りが内外面とも施されている。18は弥生時代後期の甕の口縁部である。19は弥生時代後期終末の壺の口縁部である。外面に櫛描波状文がみられる。内面に指圧痕がある。20は弥生時代後期終末の長頸壺である。外面は指圧痕が中ほどにみられ、あとは内外面ともナデで調整されている。丹塗りが内外面ともみられる。21は弥生時代後期の鉢である。内外面ともナデで調整されている。外面下部には黒斑がみられる。内外面に丹塗りがある。

第18図22～25は区域２の出土である。22・24・25は黒褐色土層からのものである。22は縄文時代晩期前葉から中葉の浅鉢である。黒色研磨で器形は胴部中ほどで外反する。24は縄文時代晩期前葉から中葉の深鉢である。胴部の下部ではやや外側に立ち上がり、中ほどでやや外反する。その境目では強いナデが横方向に施されている。内外面とも、やや粗いナデで接合部がみられる部分がある。25は打製石斧である。主要な剥離は、表面・裏面とも同じ方向から打撃を加えられている。また表面の左側縁部および裏面の右側縁部とも、同じ方向からやや大きい剥離が施されている。一方その反対側の側縁部では比較的細かい剥離がされている。石材は安山岩である。23は表土から出土した。弥生時代後期後半の二重口縁壺である。外面には丸い円形竹管刺突文が縦方向に数箇所みられる。

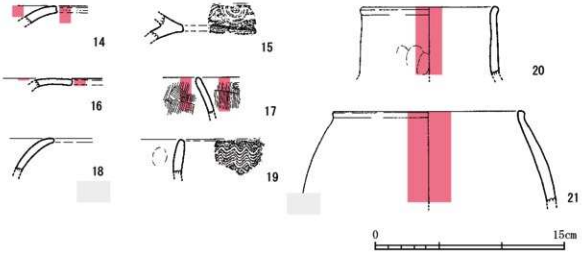
第18図26は区域２の遺構検出時に出土した打製石斧である。石材は緑色片岩である。主要な剥離は表面・裏面とも斜め上から反対方向からの打撃が加えられている。表面と裏面の右側縁部は左側縁部と比べて執拗に剥離がされている。第18図27は区域２の撹乱からの出土した鉄製鉋である。刃部及び基部は欠損している。



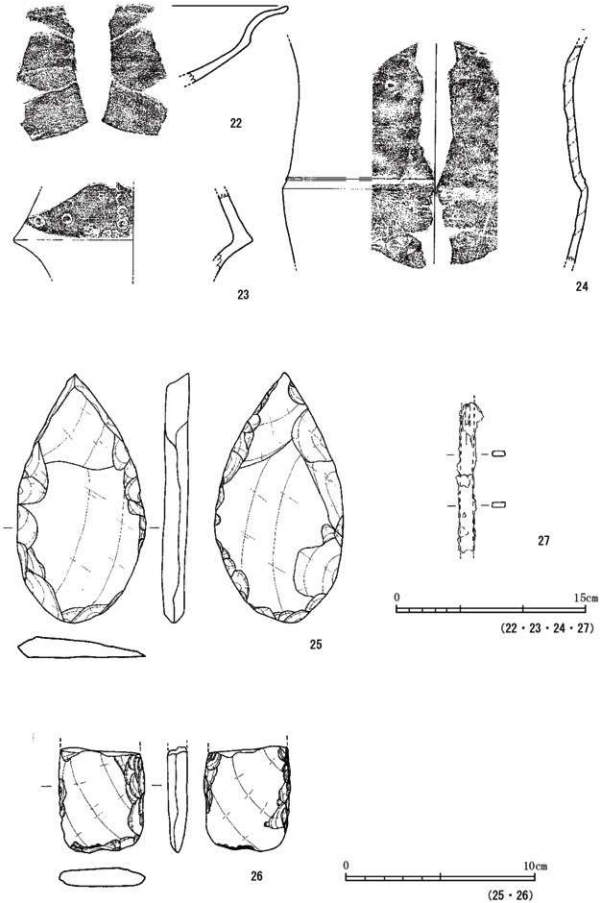
第 15 図　区域 1　SH1 出土遺物実測図（1～7：1/3，8：1/2）



第16図　区域1　SK2・遺構検出時・撹乱出土遺物実測図（9：1/2，10～12：1/3，13：1/1）



第17図　区域2　SH2・SH4出土遺物実測図（1/3）



第18図　区域2　表土掘削・遺構検出時・撹乱出土遺物実測図（22～24・27：1/3，25・26：1/2）

第４表　遺物観察表（土器）

挿図	遺物番号	区域	遺構（取り上げ番号）	器　種	時　期	口径（残存幅・cm）	器高（残存高・cm）	底部径（胴部最大径・cm）	外面の文様・調整	内面の文様・調整	内・外面色調	備　考
第15図	1	区１	SH1	甕	弥生		3.2+α		ヨコナデ・タテ方向のハケメ	ヨコ方向のハケメ	(内・外) 黄橙色	
第15図	2	区１	SH1 (No2)	小型鉢	弥生後期後半	(17.2)	14.5	(17.2)	タテハケ・ナデ・ヨコナデ	指圧痕・ナデ・ヨコナデ	(内・外) 橙褐色	内外面：丹塗り
第15図	3	区１	SH1 (No1)	甕	弥生後期終末～古墳時代初期	(21.6)	23.6+α	(28.6)	ヘラケズリ・タテハケ・ナナメハケメ・ヨコナデ	ケズリ後ナデ・タテハケ・ヨコハケ・ヨコナデ	(内・外) 淡橙褐色	外面：スス付着
第15図	4	区１	SH1 (No1)	甕	弥生後期終末頃	(21.2)	10.9+α		ナデ	ナデ・指圧痕	(内・外) 黄橙色	口縁部内面:スス付着
第15図	5	区１	SH1 (No2)	甕	弥生後期終末		10.5+α	2.8	タテ方向のハケ	工具ナデ	(内) 灰褐色 (外) 黄橙色	内外面：スス付着
第15図	6	区１	SH1	甕	弥生中期～後期前葉		5.5+α	11.0	ナデ・指圧痕	ナデ	(内・外) 橙色	
第15図	7	区１	SH1	甕	弥生後期終末		2.5+α	1.6	ナデ	ナデ	(内) 橙色 (外) 茶褐色	
第16図	10	区１	遺構検出時	深鉢	縄文晩期前半		5.0+α		条痕	条痕	(内・外) 暗黄褐色	
第16図	11	区１	A2 撹乱	深鉢	縄文晩期前半		5.3+α		ナデ後沈線	ナデ	(内・外) 黒褐色	
第16図	12	区１	A2 撹乱	浅鉢	縄文晩期初頭		4.2+α		ナデ後沈線	ナデ	(内・外) 暗褐色～黒褐色	滋賀里Ⅱ式
第17図	14	区２	SH2	甕	弥生		1.4+α		ヨコナデ	ヨコナデ	(内・外) 赤褐色	内外面：丹塗り
第17図	15	区２	SH2	壺	弥生後期中頃～後半		1.9+α		ヨコナデ･櫛描波状文	ナデ	(内・外) 浅黄橙色	
第17図	16	区２	SH4	高坏	弥生		0.7+α		ヨコナデ	ヨコナデ	(内・外) 赤色～にぶい橙色	内外面：丹塗り
第17図	17	区２	SH4	鉢	弥生		2.9+α		ヨコナデ・ハケメ	ハケメ・ヨコナデ	(内) 橙色～にぶい橙色 (外) 橙色～赤褐色	内外面：丹塗り
第17図	18	区２	SH4	甕	弥生後期		2.7+α		ヨコナデ	ヨコナデ	(内) にぶい橙色 (外) にぶい黄橙色	
第17図	19	区２	SH4	壺	弥生後期終末		2.3+α		ヨコナデ・波状文	ヨコナデ・指圧痕	(内・外) にぶい橙色	
第17図	20	区２	SH4	長頸壺	弥生後期終末	(10.8)	5.4+α	(11.0)	ヨコナデ・指圧痕	ヨコナデ・丹塗り	(内・外) 明赤褐色	内外面：丹塗り
第17図	21	区２	SH4	鉢	弥生後期	(15.2)	7.2+α	(20.2)	ヨコナデ・ナデ	ナデ・ヨコナデ	(内) 赤色～にぶい橙色 (外) 黒褐色～にぶい橙色	内外面：丹塗り 外面：黒斑
第18図	22	区２	黒褐色土層	浅鉢	縄文晩期前半		6.1+α		ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	(内) 黒褐色 (外) 褐色～にぶい褐色	
第18図	23	区２	表土掘削	壺	弥生後期後半		6.5+α		ヨコナデ・円形竹管刺突文	ヨコナデ	(内) 橙色 (外) 橙色～にぶい橙色	
第18図	24	区２	黒褐色土層	深鉢	縄文晩期前半		17.2+α	(24.4)	ナデ	ナデ	(内) 黒褐色～にぶい橙色 (外) 黒褐色～褐色・にぶい橙色	

第５表　遺物観察表（石器）

挿図	遺物番号	区域	遺構・層位	取り上げ番号	種　類	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
第15図	8	区１	SH1	№２	打製石斧	安山岩	7.0＋α	8.9	1.2	145.3	上部欠損
第16図	9	区１	SK2		磨製石斧	緑色片岩	9.9＋α	4.9	1.5	112.3	主面・側面欠損
第16図	13	区１	A2 撹乱		石鏃	姫島産黒曜石	2.5	1.4	0.4	1.3	左脚部欠損
第18図	25	区２	黒褐色土層		打製石斧	安山岩	13.1	6.8	1.1	136.4	
第18図	26	区２	遺構検出時		打製石斧	緑色片岩	5.5＋α	4.5	1.1	46.5	上部欠損

第６表　遺物観察表（金属器）

挿図	遺物番号	区域	遺　構	種　類	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	重さ（g）	備　考
第18図	27	区２	撹乱	錐の柄	11.7＋α	1.0	0.4	10.8	刃部及び基部は欠損

第４章　総括

今回の調査については縄文時代晩期から弥生時代の遺構・遺物が確認された。以下、時代ごとに総括する。

縄文時代については、遺構の確認はなかったが、遺物が出土している。区域１から縄文晩期前葉から中葉の深鉢と滋賀里Ⅱ式の浅鉢が出土している。また区域２の表土掘削時には、黒褐色土層から縄文時代晩期前葉から中葉の浅鉢と深鉢が出土している。今回調査した五ヶ瀬中遺跡から北約1.3kmに仲ノ原遺跡があり、縄文時代の遺跡の存在をここでも推定することができる。五ヶ瀬中遺跡で出土した縄文時代の石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃であった。

弥生時代については、区域１から柵列が並んで２基みられた。また竪穴建物は１基確認された。柱の位置から４本柱の構造を持つものと推定できる。床面から出土した甕の時期から、弥生時代後期終末～古墳時代初期まで存続していたことが分かる。円形の浅い不明遺構も確認されたが、その時期は不明である。区域２については３基の竪穴建物が確認された。ＳＨ２は４本柱の構造をもつ。遺物は弥生時代後期中頃～後半の土器が出土している。ＳＨ４は柱穴がみられなかったが、形状、深さから竪穴建物とした。丹塗りの弥生時代後期終末の土器が出土している。土坑も数基検出したが、時期は不明であった。

以上のように、五ヶ瀬中遺跡の調査が実施されるまで、この地域では遺跡の調査例がほとんどなく、遺跡の概要がほとんど知られていなかった。また遺跡の所在が希薄であったが、今回の調査では、弥生時代後期後半から終末の時期の竪穴建物４基の竪穴建物が検出され、弥生時代の集落を確認することができた。また表土掘削や撹乱から、縄文時代晩期初頭から中葉の土器も出土していることから、周辺に縄文時代の遺跡の存在も期待することができる。

図　版

五ヶ瀬中遺跡遠景（西から）

五ヶ瀬中遺跡全景

図版２

区域１全景

区域２全景

区域１南側完掘全景（北より）

区域１北側完掘全景（南から）

図版4

区域１　ＳＨ１完掘（北から）

区域１　ＳＨ１完掘（東から）

区域１　ＳＨ１土器出土状況（東より）

区域１　ＳＡ２・ＳＡ３完掘（北より）

区域１　ＳＫ１完掘（東から）

区域１　ＳＫ２完掘（北西から）

区域１　ＳＸ１完掘（東から）

図版6

区域２　完掘全景（南から）

区域２　完掘全景（北西から）

区域２　ＳＨ２完掘（西から）

区域２　ＳＨ３完掘（東から）

図版8

区域２　ＳＫ３完掘（東から）

区域２　ＳＫ４完掘（北から）

区域２　ＳＫ５完掘（東から）

区域２　ＳＫ６完掘（東から）

区域２　ＳＫ７完掘（東から）

区域２　ＳＫ８完掘（東から）

区域２　ＳＫ９完掘（北から）

区域２　ＳＨ４完掘（西から）

第 15 図 1

第 15 図 2

第 15 図 3

第 15 図 4

第 15 図 5

第 15 図 6

第 15 図 7

第 15 図 8（表）

第 15 図 8（裏）

図版 10

第 16 図 9（表）

第 16 図 9（裏）

第 16 図 10（外）

第 16 図 11（外）

第 16 図 12（外）

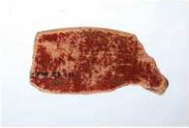
第 16 図 12（内）

第 16 図 13（表）

第 16 図 13（裏）

第 17 図 14（外）

第 17 図 15（外）



第 17 図 16（外）

第 17 図 17（外）

第 17 図 18（外）

第 17 図 19（外）

第 17 図 20（外）

第 17 図 20（内）

第 17 図 21（外）

第 17 図 21（内）

図版 12

第 18 図 22（外）

第 18 図 23（外）

第 18 図 24（外）

第 18 図 24（内）

第 18 図 25（表）

第 18 図 25（裏）

第 18 図 26（表）

第 18 図 27

報告書抄録

ふりがな	ごかせなかいせき
書名	五ヶ瀬中遺跡
副書名	県道庄内久住線（大龍工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第７集
編著者名	土谷崇夫
編集機関	大分県立埋蔵文化財センター
所在地	〒870-0152　大分市牧緑町１-61
発行年月日	2019(平成31)年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
五ヶ瀬中遺跡（ごかせなかいせき）	由布市庄内町大字五ヶ瀬字中	44213	2131107	33°10’15”	131°26’35”	2017.10.10 ～ 2017.11.15	856㎡	県道庄内久住線（大龍工区）道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代・遺構	主な遺物	特記事項
五ヶ瀬中遺跡	集落	弥生時代 竪穴建物・土坑・ピット	縄文土器・弥生土器・ 石器・鉄器	
要約	県道庄内久住線（大龍工区）道路改良工事に伴い、由布市庄内町大字五ヶ瀬字中に所在する五ヶ瀬中遺跡の発掘調査を実施した。 発掘調査の結果、弥生時代後期終末～古墳時代初期に存続した集落が確認された。また、縄文時代晩期初頭から中葉の土器も出土しているので、その遺跡も付近にあると推定される。			

五ヶ瀬中遺跡

― 県道庄内久住線（大龍工区）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

発行年月日	平成31年３月29日
編　　集	大分県立埋蔵文化財センター
所　在　地	〒870-0152　大分市牧緑町１-61 TEL 097（552）0077
印　　刷	九州凸版印刷株式会社 〒870-0941　大分市大字下郡3154番地の22 TEL 097（569）0191